

図書館における高齢者の資料選択理由の分析

宇陀則彦*

Analysis of Reasons for Selecting Materials for Older Adults in a Library

Norihiko UDA

抄録

日本の人口における65歳以上の高齢者の割合は年々増加しており、高齢者への対応の取り組みが社会の様々なところで始まっている。図書館でも高齢者サービスの充実が期待されているが、図書館資料の形成方法と高齢者への提供方法の確立は重要な課題の一つである。しかしながら、これまで選書や読書支援等、サービス提供側の図書館についての研究は数多くあるが、高齢者がどのような理由で資料を選ぶのかという利用者の立場からの研究はほとんど行われていない。そこで本研究では、高齢者の資料選択の特徴を明らかにすることを目的とする。本調査では、高齢者と大学生に実際に図書館で自由に資料を選んでもらい、その理由をインタビューで尋ねた。調査の結果、高齢者特有の資料選択行動をいくつか明らかにすることができた。

Abstract

The proportion of adults who are 65 years and older in Japan's population is increasing, and initiatives for supporting the elderly are on the rise in many social fields. Although libraries are also expected to provide full service for the elders, a major obstacle to this effort emerges in the establishment of effective methods for the development of an appropriate collection of material suited to the seniors' preferences. Although research on the selection of books and on readers' advisory has been conducted by many libraries, there has barely been any research done from the point of view of the reader and as to why the elderly choose the materials they do. With this in mind, the current study investigates the information behavior of aging readers from the point of view of material selection and aims to understand the underlying characteristics of the choices they make. For this study, older adults and university students were asked to freely select materials at a library and were interviewed about their decisions. Ultimately, the study was able to clarify some information selection actions specific to older adults.

* 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1. はじめに

2017年度の高齢社会白書によれば、我が国の総人口に占める65歳以上の割合は27.3%であり、2033年には33.6%に達する見込みである。また、高齢化率が7%を超えてからその倍の14%に達するまでの所要年数を比較すると、フランスが115年、スウェーデンが85年、米国が72年、英国が46年、ドイツが40年に対し、我が国は24年と非常に短い¹⁾。このような急速な変化に対し、図書館も対応を迫られているが、十分なサービスが確立されているとは言い難い。

図書館における高齢者サービスについて、高島は「高齢者および高齢者に関わる人々のニーズに応える資料や情報の提供および生涯学習の機会の提供」と定義した²⁾。また、高齢者への資料の貸し出しやレファレンスサービスなど、通常の図書館サービスの充実に限らず、公民館や高齢者センターなどと図書館が連携する必要がある、と述べている³⁾。つまり高齢者サービスとはまず、高齢者のニーズや特性を理解し、それに応じて時には関係機関と連携しながら提供されなければならないものである。

そこで本研究では図書館の高齢者サービスを新たに構築するため、図書館における高齢者の情報行動を、資料選択という観点から調査し、高齢者の情報行動の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 関連研究

2.1 日本の高齢者サービスの現状

日本の公共図書館では当初、高齢者は障害者サービスの対象として位置づけられていた。しかしながら、1980年代半ばから独立した対象として位置づけようという動きが広がり、2001年の「公立図書館の設置および運営上の望ましい基準」⁴⁾で高齢者を独立した利用者カテゴリに位置づける流れが定まった⁵⁾。

日本の高齢者サービスの状況については、個別の調査はあったものの⁶⁾、全体を調査した研究は長らくなかった。はじめて全国的な調査が行われたのは2001年の村上らによる調査⁷⁾で、最近では2013年の呑海らによる調査がある^{8,9)}。呑海らによる調査は、都道府県立図書館47館、人口20万人以上の市が設置する図書館110館、同条件の特別区が設置する図書館20館、合計177館に質問紙を送付する形で行われた。回収率は都道府県立図書館が91.5% (43館)、市立図書館が87.3% (96館)、特別区立図書館が80% (16館) で、全体では87.6% (155館) であっ

た。この調査から以下のことが明らかになっている。

1. 回答館の5館に1館が高齢者を対象とした資料コーナーを設置している一方で、約3割が高齢者を意識した資料収集を行っていない。
2. 自動ドアやエレベータは9割以上、老眼鏡や拡大鏡は9割前後の館で設置されている。
3. 回答館の8割以上が、高齢者を対象とするお話し会などの館内サービスを実施していない。
4. 回答館の7割近くが、高齢者向け施設等への資料の貸出を行っている一方で、9割近くがこれ以外の館外サービスを行っていない。
5. 回答館の約5割が、高齢者サービス展開の阻害要因として高齢者ニーズの認識不足および職員数の不足を、4割が予算不足をあげている。
6. 図書館サービスにおける高齢者の位置づけの現在については、特に意識していないとした館が5割以上あり、障害者サービスとしてとらえる、あるいは独立したカテゴリでとらえるとした館が1割程度であった。
7. 図書館サービスにおける高齢者の位置づけのこれからについては、障害者サービスとしてとらえる、あるいは特に考える必要はないとした館がそれぞれ1割程度であり、独立したサービスとしてとらえるとした館が3割ある一方で、その他と回答した館が5割弱となった。
8. 図書館サービスにおける高齢者の位置づけの現在とこれからについては、高齢者を「独立したカテゴリ／サービスとしてとらえる」が現在に比べてこれからが22ポイント増加しているのに対して、「意識していない／考える必要はない」が約45ポイント減少している。また、「その他」もこれからが約25ポイント増加している。

2.2 個別の対応

高齢者を対象とした資料コーナーを設置している図書館が2割程度であることや高齢者サービスを独立したサービスとしてとらえるとした図書館が3割程度であることなど、高齢者サービスが確立しているとはいえない状況にあるものの、近年では、高齢者先進的な取り組みがいくつか個別に開始されている。

川崎市立宮前図書館では、2008年5月に図書館協議会答申「川崎市立図書館の運営理念と活動目標について」が出され、「市民の仕事や生活に役立つ図書館」という項目ではコミュニティ形成に貢献すべき情報提供機関として図書館が明記されている。2015年12月には、認知症

に焦点をあてた情報コーナーを常設する運びとなった。2016年には「川崎市地域包括ケアシステム」の推進ビジョンを策定し、市と一体となって高齢者サービスに取り組みを開始した¹⁰⁾。

鳥取県立図書館では、2012年から「あたまイキイキ音読教室」を開催し、所蔵資料を使って参加者全員で本を一斉に声を出して読む催しである。音読教室の一番のキーポイントは読む本の選書であるという。2013年には健康づくり、病気、介護、年金、遺言、セカンドライフなど、中高年層に関心の高い分野の資料を一か所にまとめた「いきいきらいふ応援コーナー」を設置した。これらの活動はプレスリリースをうち、県民へのPRを行った。さらに市町村図書館への支援として音読サポーターの派遣も行っている¹¹⁾。2017年には、「オレンジネットワーク鳥取モデル」を推進し、認知症関連の図書展示や講演会を行っている¹²⁾。名古屋市鶴舞中央図書館でも名古屋市の高齢者数が急増することを受け、2013年から「長寿イキイキ音読教室」を開催した^{13,14)}。

熊取町では、2015年度から地域包括支援センターの呼びかけで、健康相談や認知症座談会などを行う「ひまわりカフェ」を開催した。図書館も企画相談、チラシ配布、関連図書展示を行い、協力した¹⁵⁾。そのほか、田原市中央図書館¹⁶⁾、福井市立図書館¹⁷⁾、秋田県立図書館¹⁸⁾、横浜市中図書館¹⁹⁾、富山県内の図書館²⁰⁾でも資料提供や相談会などの取り組みが行われている。

海外では、日本よりはやく取り組みが行われており、米国のブルックリン公共図書館では、高齢者サービスの専任担当者が5人ほど配置されており、識字支援サービス、ナーシングホーム、在宅高齢者への資料配送、講演会、読書会、上映会、コンサートなど多彩なサービスが展開されている²¹⁾。クイーンズ図書館では、資料の郵送サービスのほか、高齢者センターで使うためのファッション、自動車、ペットなどを回想するピフォカルキット²²⁾が提供されている²³⁾。ノースショア公共図書館では、有料サービスと無料サービスがあり、有料サービスにはヨガを中心としたストレッチプログラム、無料サービスにはメディケア²⁴⁾に関する相談会、血圧測定会、映画会、コンピュータのボーリングゲームがある²⁵⁾。サンノゼ公共図書館では、高齢者の生活に密着した情報提供サービスのほか、高齢者栄養プログラムが実施されている。これは高齢者に栄養価の高い食事を低コストで提供し、予防医療と長期ケアを推進するものである²⁶⁾。

2.3 ガイドライン等

図書館サービスの図書館全体に広げるため、高齢者

サービスの方向を定めたガイドラインがいくつか策定されている。

米国図書館協会 (American Library Association (ALA)) の下部組織であるレファレンス・利用者サービス協会 (Reference and User Service Association (RUSA)) は、55歳以上を対象とした「高齢者のサービスガイドライン」を公開し、2005年、2008年と改訂されている²⁷⁾。2017年には60歳以上を対象としたガイドラインを公開した²⁸⁾。カナダでも2002年にガイドラインが公開されている²⁹⁾。2007年には国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions (IFLA)) が「認知症の人のためのガイドライン」を発表した³⁰⁾。

ガイドライン以外の特徴的な試みとして、英国では、「処方箋としての読書プログラム」の取り組みを行っている³¹⁾。このプログラムは2013年に読書協会、家庭医学会、精神科医学会、英国看護学会、英国心理学会などのメンタルヘルス関連組織とともに推進されているプログラムで、専門家が患者に適切だと思われる推薦図書のチェックリストを公共図書館に持参すると、当該図書を借りられる仕組みとなっている。2015年には「認知症のための処方箋としての読書プログラム」が開始された。

日本では、厚生労働省が認知症施策推進総合戦略として2012年にオレンジプラン、次いで2015年の新オレンジプランを発表した³²⁾。新オレンジプランでは、①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進、②認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供、③若年性認知症施策の強化、④認知症の人の介護者への支援、⑤認知症を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進、⑥認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進、⑦認知症の人やその家族の視点の重視の七つの柱をあげている。

このような状況を受け、図書館の高齢者サービスのガイドライン公表にむけ、超高齢社会と図書館研究会が「認知症にやさしい図書館ガイドライン」の策定作業を急ピッチで進めている。同時に本の処方箋プロジェクトも進行中である³³⁾。

2.4 高齢者の読書

ここまで見てきたように、高齢者向けサービスは、高齢者向け資料コーナーの設置、資料配送、読書会など、資料を活かした図書館ならではのサービスを試みている。しかしながら、現在のところ、高齢者の資料選択の動機や行動を明らかにしないまま行っている試みがほとんどであり、高齢者の真のニーズに即した選書を行うた

めには、高齢者の資料の選択動機や読書理由を明らかにする必要がある。

高齢者の資料選択については、読書活動という観点からいくつかの研究がある。Ahlvers は85歳以上、64-84歳、44-63歳に3グループに分けて調査を行い、リクエストの多かった著者のランキングを作成した³⁴⁾。日本でも類似の調査があり、堀は大阪府松原市民図書館を調査し、60歳以上の高齢者の読書パターンを整理した³⁵⁾。これによると、高齢者が興味関心を示す領域は、「自分の能力を発見しやすいもの」、「フィクション、伝記、聖書、ウェスタン、ミステリ、新聞、大型活字本、旅行関係」、「性的表現をとまなわないライトロマンス小説」「ノスタルジーのある物語」で、あまり興味を示さない領域は、「SF小説、ホラー小説」、「性や暴力がストレートに表現されるもの」、「職業や専門性に関するもの」、「ハツウツウ本」、「プロットが複雑に込み入っているもの」、「登場人物が多いもの」であった。また、加藤らは宝塚市と三木市のデータを分析した³⁶⁾。宝塚市では60代の小説の利用がずば抜けて多く、次いで70代、40代であることを明らかにした。三木市では60代男性の文学の貸出は50代の3倍であること、60代女性の貸出は1.5倍であることを明らかにした。しかし、これらの研究は選択した理由については調査していない。

加藤は論文のまとめとして、高齢者は想像以上に多様な存在で、図書館利用のきっかけ、図書館利用歴、利用の仕方、読書経験、読書観、健康状態、障害の有無とさまざまであることを指摘し、利用者と資料を結びつけるために一人一人の利用実態を細やかに分析する必要があると述べている³⁷⁾。同様のことは、日本図書館研究会のセミナーの討議のなかで、個人個人を見ないといけないという発言がある³⁸⁾。

2.5 資料選択と蔵書構成

図書館における高齢者の資料選択と密接に関係するのが蔵書構成³⁹⁾である。資料選択と蔵書構成について詳しく論じたのが河井である。河井はまず「蔵書構成」という用語にも「資料選択」という用語にも二義性があると述べている。蔵書構成の第一の意味は図書を選択していく行為の意味であり、いま一つは蔵書の内容の意味である。一方、資料選択は蔵書を形成するための資料選択(1)と蔵書の中から利用者のために適書を選び出す資料選択(2)という二つの段階を含む両義概念であるとしている⁴⁰⁾。筆者はここに利用者自身が資料選択(3)をする行為も加えたい。資料選択(1)は「選書」と呼ぶことが多く、資料選択(2)は読書相談と関係があり、

資料選択(3)は読書興味と関係がある。これらの関係を表したのが図1である。

資料選択(1)は全蔵書との関係を考慮しながらも、究極的には特定の資料について下される判断であるが、蔵書構成においては、各主題・タイプ別の資料の数量を通して、蔵書全体の構造を考えようとする。この両観点はそれぞれ独自の意味を持ち、両者が緊密な連携をもって推進される時はじめて、目的にかなった蔵書が作られる⁴¹⁾。

蔵書は収集可能な資料の集合(T)から何らかの規準にしたがって選択した資料の真部分集合(S1, S2, S3, … Sn)とみなすことができる。ただし、集合Tは確定することができず、絶えず成長し続けており、同様に真部分集合も絶えず変化し成長している。真部分集合としての蔵書構成は特定の時間と場所で、特定のコミュニティのために形成、維持されてきたという点で固有の性格を持つ⁴²⁾。蔵書は一度構成すれば完成ということではなく、常に変動し成長していく。しかもこの変動は大なり小なり社会変動、社会的ニーズの変動に対応している⁴³⁾。蔵書構成の英語の用語が collection building から collection development に変化したのは、もはや一定の完成像を目指すのは困難であるので、完成点を予想しない、果てしない発展を意味する development のほうが実情に近いからであると思われる⁴⁴⁾。

蔵書構成と資料選択については、多くの議論があるが、大きくは価値論と要求論に分かれる。価値論は資料の選択基準を資料そのものの価値に置く立場で、要求論は資料の選択基準を利用者の要求にあるとする立場である。これらの議論がどのような推移をみせたかについては山本の論文が詳しい^{45,46)}。

2.6 読書興味と読書相談

利用者は自身のニーズに基づいて資料を選択する。

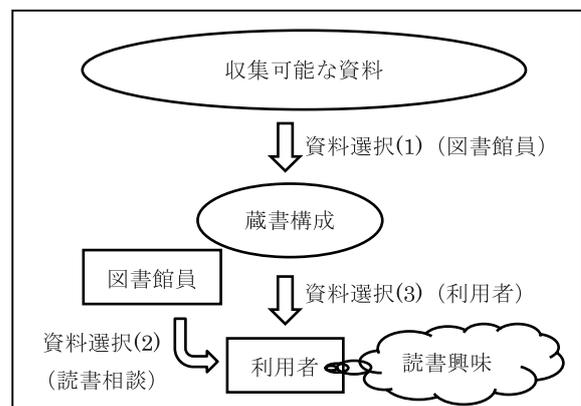


図1 資料選択と蔵書構成の関連

ニーズとは利用者の読書目的に最適の図書を求める欲求である。この欲求にもとづいて利用者は資料選択（3）を行うのであるが、利用者は社会の一員であるので、社会が要請すること（社会需要）の影響も受けざるをえない。河井は2009年の著書でゲラー⁴⁷⁾の要求理論を紹介し、個人の欲求と社会需要について整理している。

ゲラーによれば、「欲求」は単に原始的欲求だけでなく、「生産の中で生ずる、より大きな知識への要求」も含むとし、欲求それ自体は何の機能も持たず、「興味」という「現象形態」をとることによってはじめて「はたらし」を示すことができるとする。一方、「社会需要」については、人が行為する際、これに対して常に何らかの外的条件がかかり、個人に対して規制的影響を及ぼす社会的必然性および必要性であるとした。社会需要はしたがって、個人の欲求からは独立して社会自体の歴史的必然性として存在し、自律性を持つ。つまり、興味は一方では「社会需要」の内面化として成立し、他方では個人の内発的な「欲求」の外面化および現実化として形をなす。ここに社会需要と個人の欲求との弁証法的統一（社会需要→興味←欲求）が達成される⁴⁸⁾。

資料選択（3）はこのような個人と社会の複合的な読書興味から生じる行為である。ただし、読書興味は利用者の内面に常にあるわけではない。実は読書興味の多くが、対象を示されてはじめて自覚される興味である。図書館で書架を眺め、図書を手にしているうちに読書興味を覚える。読書興味の多くはこのように受動的なものであって、適当な対象を示されるまでは仮眠状態におかれている。このように読者興味は潜在的な要求であることから、図書館は利用者がくる前に彼らの興味に応える蔵書を揃えておく必要がある⁴⁹⁾。

では、読書興味を意識しない、あるいは読書興味が明確でない利用者に対して図書館はどうすべきであろうか。これが読書相談サービスである。読書相談サービスは readers' advisory service⁵⁰⁾の訳語であるが、他にも、読書指導、読書相談、読書案内という訳語もある。読書相談サービスは19世紀末の米国の公共図書館で参考調査業務の一部として行われていた記録があり、1930年代にはさらに多くの図書館で積極的に取り組むようになった。読書相談は利用者の読書歴、能力、必要度などを勘案して読者が自分に適した図書を見つけ出し、場合によっては書誌リストの作成までを行う多彩な業務であった⁵¹⁾。

読書相談サービスがレファレンスサービスに属するものかどうかに関して、しばしば議論が持ち上がり、意見が分かれている。また、図書館における読書相談は、常

に資料提供サービス、すなわち貸出の一環として行われるものなので、貸出サービスとの連携で処理されるべきであるという考え方も強い。一方、読書相談サービスとレファレンスサービスとのあいだの境界は、それほど明確ではないという意見もある。レファレンスの副次的サービスと位置付けられている場合や貸出サービスとの連携で処理される場合は読書案内という用語が使われ、生活の充実、人間形成、社会性の発達など、教育的な意図がある場合は読書指導や読書相談という用語が使われることが多い。現在は、理論上は読書相談サービスとレファレンスサービスを区別して考えることに、ほとんど異論はないであろうが、実際のサービス運営に際しては、業務の便宜的な要素が強く作用する⁵²⁾。

3. 調査の概要

呑海の調査にあるように、現在の高齢者サービスは高齢者を意識した資料収集を行っている図書館は少なく、高齢者を対象とした資料コーナーを設置するにとどまっている。その原因としてあげられているのは高齢者ニーズの認識不足である。高齢者ニーズには多くの事柄が含まれるが、図書館の基本が資料提供であるならば、まず高齢者の資料に対するニーズを明らかにする必要があるだろう。高島は、高齢者は生きてきた時間と体験により、どの年代よりも多様性を持っており、読書分野も多様で、特定の分野としての高齢者資料はあり得ないと指摘するが⁵³⁾、高齢者の読書分野がどのぐらい多様で、どのような読書興味から資料選択がなされるかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では、実際に図書を選択してもらい、大学生と比較することにした。

本調査は筑波大学附属図書館の図書館情報学図書館2Fで30分間ブラウジングをしてもらい、興味のある資料を見つけた際は、iPad miniで資料の背表紙を撮影してもらった。ブラウジング後には、選んだ資料20～30分のインタビューを行い、資料を選んだ理由を尋ねた。筑波大学附属図書館は中央図書館のほか、体育・芸術図書館、医学図書館、図書館情報学図書館、大塚図書館から構成される。図書館情報学図書館は2階建ての建物で床総面積は2,848m²である。1Fは図書館情報学に関する資料が中心で、2Fはそれ以外の資料を所蔵している。最初は中央図書館で実施することを考えたが、予備実験の結果、広すぎて時間がかかってしまうことが判明し、広さと蔵書構成の観点から図書館情報学図書館で行うことにした。

対象は筑波大学附属図書館のボランティアグループに

所属している65歳以上の高齢者9名と筑波大学の大学生9名である。大学生の内訳は、人文学類4年生1名、3年生1名、2年生1名、看護学類4年生1名、社会国際学群国際総合学類3年生1名、日本語・日本文学類4年生1名、3年生1名、比較文化学類2年生1名、心理学類3年生1名となっている。図書館の利用時間を確認するため、高齢者にはボランティア歴を、大学生には図書館利用の頻度を訪ねた。

調査にあたっては事前に以下の説明を行った。なお、下見は不要であることを事前に伝えてある。

- ・ 普段どおりに本棚を眺め、資料を選択してほしい
- ・ 中身の確認のため、本を読んでもよい
- ・ 調査に関する質問があれば、随時行ってよい

調査の結果、高齢者と大学生の選択した資料数は表1と表2のようになった。

選択資料の分類の内訳は図2のとおりである。分類は日本十進分類法（NDC）によった。選択資料の一部は付録につけた。高齢者も大学生も歴史と社会科学が多いことがわかる。これは実験協力者の属性と図書館情報学図書館2Fの書架のレイアウトに依存する可能性がある。協力者は実験を開始した地点から資料を見るので、時間内に全ての書架を見られない場合があるからである。

次に、インタビューの発話を分析し、資料を選択した

表1 高齢者の選択数

ID	年齢	ボランティア歴	選択資料数
A-1	70歳	半年	13冊
A-2	70歳	2年	57冊
A-3	73歳	20年	17冊
A-4	77歳	5年	10冊
A-5	75歳	5年	16冊
A-6	70歳	21年	66冊
A-7	71歳	3年	18冊
A-8	80歳	13年	8冊
A-9	72歳	10年	9冊

表2 大学生の選択数

ID	学年	図書館へ行く頻度	選択資料数
B-1	3年生	月に5回	17冊
B-2	4年生	月に1回	10冊
B-3	2年生	週に1,2回	17冊
B-4	4年生	週に2,3回	20冊
B-5	4年生	月に1回	5冊
B-6	4年生	週に1回	5冊
B-7	2年生	2週間に1回	14冊
B-8	3年生	半年に1回	2冊
B-9	3年生	月に2,3回	9冊

理由をタグとして付与した。例えば、「以前プレゼントされた本だったから」といった発話の場合は「経験・記憶」のタグを付与し、「江戸時代に興味があるので」という発話には「日本史」のタグを付与するといった具合である。結果として、カテゴリを主題と想起の2つに分けた。

4. 高齢者の資料選択の特徴

4.1 結果

高齢者と大学生の資料選択を比較した結果、以下のことが明らかになった。

- (ア) 高齢者は大学生に比べて多くの資料を選択する。
 高齢者と大学生の選択資料数を左から昇順に並べたものが図3である。高齢者のほうが大学生より平均で倍以上の資料を選択していることがわかる。

表3 カテゴリと理由タグ

カテゴリ	理由タグ		
	日本史	日本文化	世界史
主題	社会問題	科学	話題
	人物	国際	宗教
	民族	勉強	文学
	言語	民話	健康
	趣味	デザイン	興味
	想起	経験・記憶	仕事（過去）
専攻		準備・予習	問題解決

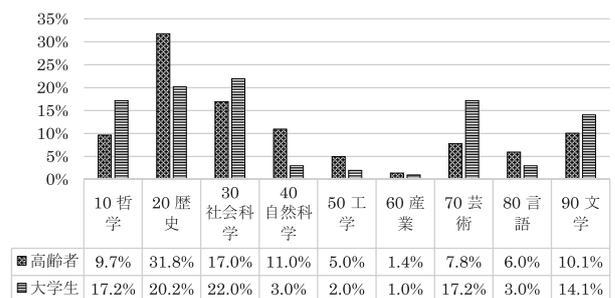


図2 選択資料数の分類

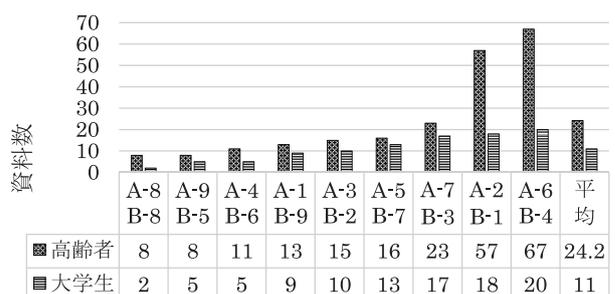


図3 選択資料数の比較

最大値同士の比較では3倍の差がある。

(イ) 高齢者は大学生に比べて資料選択の理由が多様である。図4と図5とを比べると、高齢者のほうがより多様な理由を挙げていることがわかる。

(ウ) 高齢者は過去の仕事を含む経験と記憶を理由として資料を選ぶ傾向にある。(図4および発話1～6)

・発話1 (高齢者、経験・記憶)

『子供の昭和史』：これは私が生まれた頃の本です。私が小学生の頃って本当に色々雑誌があったんですよ。今雑誌が売れなくて色々廃刊になっていますよね。少女向け雑誌にもいろんなものあって、みんなで取っているのを回しっこしていました。表紙にはアイドルの写真があって、松島トモ子とかが表紙を飾っていた。

・発話2 (高齢者、経験・記憶)

『プロ野球人名事典』：幼い頃から野球が好きで、よく古い選手の最高打率がいくつだとか事典を見て覚えまして。今は新しい記録が生まれちゃって随分変わっちゃっているけど。例えば昔タイ・カップという人がいてすごかったんだよね。今はピート・ローズが記録破っちゃったでしょ。

・発話3 (高齢者、仕事 (過去))

『情報通信白書』：僕自身は光通信を少し独学で勉強してたんですけど、そういう意味でのデータの膨大な通信ってどうやって圧縮して、送るかっていう結構ある意味で物理が専攻していたときがあるので、そういったことがあるので今でも多少興味があるといったところです。

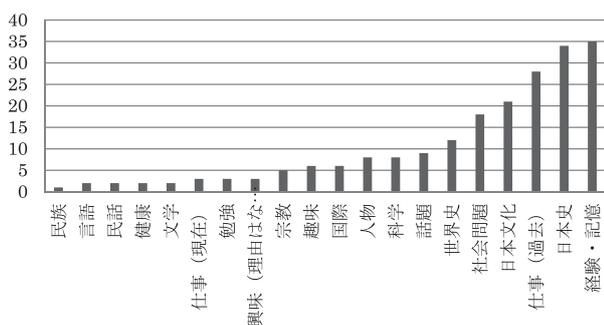


図4 高齢者の理由タグの種類と数

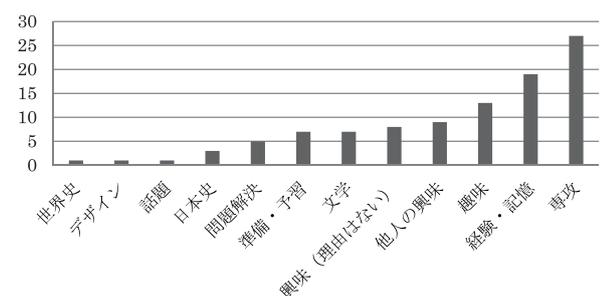


図5 大学生の理由タグの種類と数

・発話4 (高齢者、仕事 (過去))

『貨幣発行大事典』：金融機関につとめていたものですから。これは江戸時代の金貨の歴史なんておもしろいなと思ひまして。仕事でお金は扱いますが、貨幣を作るようなことはないので、逆にないということが興味をもつというあれですね。

・発話5 (高齢者、経験・記憶)

『世界の絵本児童文学図鑑』：ちょうどアメリカに行ったとき、そこでお友達になったアメリカ人の方が大学の夜間に社会人向けの児童文学の講座をしてらした。オズの魔法使いの原文を持っていてそれを使うらしい。生まれたての赤ちゃんを連れて夜間のアルバイトに行っていた。彼女が私に、薄いアメリカの童話の本をプレゼントしてくれた。

・発話6 (高齢者、経験・記憶)

『聖書を語る』：昔勤められたことがあった。昔外人の方が来られて、勤められたのを思い出しました。現役の時ですね。40～50代くらいのときでしょうか。

(エ) 今回、大学生と比較して歴史に関心がある高齢者が多かった。(図4および発話7～9)

・発話7 (高齢者、日本史)

『日本歴史地図』 - 原始・古代編』：やっぱり私、歴史が好きですから、昔どこに城があったかとか、昔この辺一帯は湖だったとか、そういうのに興味があるんですね。奈良時代が好きなんです。同窓会とか大阪であるときに、ここ何年かは奈良にもついでに行ってるんです。

・発話8 (高齢者、日本史)

『日本史の謎は『地形』で解ける』：歴史のことってあんまり知らないんです。主人なんかは江戸時代から明治時代になるときなんかの話とか大好きでよく話もするし、歴史のことを詳しいんですけど、私は詳しくないのでね。この機会に見てみようかなと思って。最近あんまり長い小説を時間かけて落ち着いて読むというような体力がなくなっている。

・発話9 (高齢者、日本史)

『日本語方言学の方法』：ほくもいろんなことやっていて、結局古代史やっていくとね、一番わかんないのはなにかというとやっぱりほんとに日本人が喋っていたのはどういう言葉なのか分かんないですよ。

(オ) 大学生の資料選択理由にも「経験・記憶」が上位にきているが、発話内容を比較すると大学生のほうは「映画でみた」や「ドラマでみた」など単発的な記憶がほとんどである。(図5および発話10～12)

・発話10 (大学生、経験と記憶)

『キリスト教礼拝事典』：これは最近見て、最近やった

スマホの脱出ゲームでキリスト教の礼拝堂から脱出しろ！みたいなので、手に取りました。

・発話11 (大学生、経験と記憶)

『歌舞伎鑑賞入門』：歌舞伎も好きで、この前見に行ったんだけど、ちゃんと勉強してから行った方が面白そうだと思う。

・発話12 (大学生、経験・記憶)

『ロシア戦争前夜の秋山真之』：ドラマの「坂の上の雲」を見て、秋山真之が主人公だったから。

(カ) 高齢者は社会問題に関する発話が比較的多いが、大学生は皆無といってよい。(図4および発話13~14)

・発話13 (高齢者、社会問題)

『学校では教えてくれなかった算数』：台風で土砂崩れが起きるとか橋が起きるとか、トンネルが落ちるとか、我々は数学的に解決しなければいけない問題がたくさんあると思うんですね。地震はマグニチュードいくつとか、数値であらわせる。物が落ちてきたとか壁が落ちてきたときに数学的に考えないといけないと思うんですね。九九八十一で終わってはいけません。

・発話14 (高齢者、社会問題)

『フランス現代史』『アフリカの現代史』『中国の現代史』：要するに、経済、経済、経済って言っている割に相手のことを知らない。どこの国に行っても、お金あげますよ、お金あげますよ、お金あげますよって言ってもね、その国にはその国の汗がにじむような国を作ってきた歴史というものがあるわけですよ。それに対する共感、それに対する尊敬、そういう何かがなければ、ただお金あげますよというのは何やっているんですかっていう話ですよ。

(キ) 学生の選択理由で最も多かったのは、自分が属している学類の専門分野に関する事柄である。(図5および発話15~17)

・発話15 (大学生、専攻)

『文化人類学が分かる事典』：自分の専攻が文化人類学で、この本やいろんな事例を説明していて読んでみたら面白そうだなって思っ。しかもあんまり重すぎなものもよかった。

・発話16 (大学生、専攻)

『路上の人々-近代ヨーロッパ民衆生活史-』：卒論で民衆の思想っていうのをやりたいくて、それに関わりがありそうだなって思っ。

・発話17 (大学生、専攻)

『外から見た日本人』：これは、卒論のことを思い出して選びました。日本文化書いている本がないかなって探

していたんですけど。

(ク) 趣味のタグは大学生には比較的多いが、高齢者にはほとんどみられない。(図5および発話18~20)

・発話18 (大学生、趣味)

『魔女と魔術の事典』：こういうオカルトなもの元々好きで、なんかこれはファンタジー好きが高じて、みたいな。

・発話19 (大学生、趣味)

『宮崎駿のマンガ論』：結構ナウシカ好きで、映画も結構…2.3回だけ観ていて、で、見てみたら「マンガ」ってあって、アニメじゃなくてマンガなんだって思っ、気になった。

・発話20 (大学生、趣味)

『登山の技術』：筑波山と、あと最近高尾山に登って、昔ボーイスカウトやっていて、でこの本がスポーツ科学の技術を登山に応用した本で、あ、面白そうだなって。

4.2 考察

本節では4.1節の項目に対応させて考察を加える。

- (ア) 資料の選択の仕方にも差があり、大学生が本の中身を確認することが多いのに対し、高齢者はタイトルだけで選択する傾向にあった。これは選択基準が資料のコンテンツにあるのか、自身の頭の中にある知識にあるのかの違いにある可能性がある。
- (イ) 高齢者のほうが大学生より多様な理由をあげているは選択資料の冊数が高齢者と大学生とで倍の違いがあることと無関係ではないと思われる。つまり、量質ともに高齢者のほうが資料の選び方が幅広いといえる。
- (ウ) 高齢者が経験と記憶から資料を選択しているのは当然の結果と思われるかもしれないが、現在の関心ごと、例えば、健康や終活のことについて多くの資料を選ぶ可能性があった。しかし、意外なことに健康や終活に関する資料はほとんど選択しなかった。また、話しぶりも高齢者と大学生では違いがあった。大学生も経験や記憶について語ることがあったが、単発的な語りなのに対して、高齢者の語りは長く濃いもので、ほとんどがひとつのストーリーといえるエピソード記憶が多かった。
- (エ) 歴史の資料を多く選択したのは今回の協力者が歴史に興味のある人が多かったという可能性があるが、人生経験を振り返る延長に歴史への興味が高まったということも予想される。今後、引き続き調査していきたい。
- (オ) 大学生に単発の記憶が多いのも今回の協力者だけに見られた発話である可能性があるが、ゲームを

理由にするのは大学生の特徴的な理由とってよいと思われる。

- (カ) インタビューをした印象としても最も大きな違いがこの社会問題に関する語りであった。大学生に比べ、社会経験が豊富であるため、高齢者の社会問題への不満や意見に関する熱意は高いものがあった。
- (キ) 大学生が自分の所属する専攻を理由に資料を選択したのは予想どおり結果であるが、講義が読書に直結するということが確認できた。
- (ク) 高齢者の選択した資料に興味を理由にしたものがほとんどなかったことは意外であった。これは(カ)と同様、社会経験が豊富なため、趣味よりも興味のあることが優先されたためと思われる。

5. おわりに

本研究では、高齢者にむけた資料提供をより細やかにするために、高齢者がどのような理由で資料を選択するのかを大学生と比較することで分析した。調査の結果、高齢者特有の資料選択行動をいくつか明らかにすることができた。今後の課題は調査対象の数を増やし、高齢者の属性や図書館の配架まで考慮にいたれた分析を行うことである。

謝辞

本研究は、日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 領域開拓プログラム」の助成を受けて、「高齢者の生活行動データベースの構築および可視化による振り返り学習の実践（研究代表者 筑波大学図書館情報メディア系 溝上智恵子）」の一部として実施しました。

査読者の皆様から貴重なご助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。また、筑波大学図書館情報メディア系講師 大庭一郎先生には専門的見地からご支援いただきました。感謝いたします。

注・引用文献

- 1) 内閣府. 平成29年版高齢社会白書. 2017, 140p. 引用は p.10-12. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html
- 2) 高島涼子. “高齢者サービスの課題”. 第48回研究大会シンポジウム：2007年問題と図書館の今後. 日本

図書館協会, 2007, p.81-86. 引用は p.82.

- 3) 同上, p.82.
- 4) 文部科学省. 公立図書館の設置及び望ましい基準. 2001. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/009.htm
- 5) 呑海沙織. 超高齢社会と図書館. 図書館界, 2017, vol.69, no.1, p.3-11. 引用は p.4.
- 6) 谷本道子, 鈴木香織. 愛知県における高齢者の公共図書館利用に関する研究. 名古屋女子大学紀要, 1997, no.44, p.23-31.
- 7) 村上良和, 小峰裕. 公共図書館における高齢者・障害者向け配慮・サービスに関する全国調査. 日本建築学会研究報告. 九州支部 (3. 計画系), 2001, no.40, p.17-20.
- 8) 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会論文集. 2014, p.45-48.
- 9) 呑海沙織. “超高齢社会における図書館サービスの課題とこれから”. 超高齢社会～生きがい作りから認知症支援まで～. 国立国会図書館. 2017, p.37-55. (図書館調査研究レポート, No.16).
- 10) 舟田彰. 地域包括ケアシステムと図書館：認知症の人にやさしいサービスの現状とこれから. 図書館界, 2017, vol.69, no.1, p.11-18.
- 11) 藤井美華子. いきいきライフ応援サービス：県内に広がる音読の輪. 図書館界, 2017, vol.69, no.1, p.18-25.
- 12) 中尾有希子. 「図書館で健康長寿！」鳥取県立図書館の高齢者サービスと県内への広がり. みんなの図書館. 2017, no.484, p.12-20.
- 13) 鈴木崇文. シニアライフを支える図書館：音読教室などの事例から. 図書館界, 2017, vol.69, no.1, p.25-33.
- 14) 鈴木崇文. 明るく楽しい音読教室 名古屋市図書館の試みから. みんなの図書館. 2017, no.484, p.21-27.
- 15) 室谷牧子. 市民を活かす図書館、高齢化社会への期待 熊取町のひまわりカフェ（認知症カフェ）の取り組みを通して. みんなの図書館. 2017, no.484, p.2-11.
- 16) 天野良枝. 子どもにわらべうたを歌うように、お年寄りに回想法を 田原市図書館元気はいたつ便の取り組み. みんなの図書館. 2017, no.484, p.28-33.
- 17) 岩城典子. 「親子で認知症を学ぶ会」の取り組みについて. みんなの図書館. 2017, no.484, p.34-40.
- 18) 天雲成津子. “暮らしの中にある図書館とは 秋田県の図書館の高齢者サービス. 高齢社会につなぐ図書館の役割. 学文社. 2012, 168p. 引用は p.101-114.
- 19) 伊藤恵理. “地域図書館の高齢者サービスの模索 横

- 浜市中図書館における高齢者向けお話し会の事例”。高齢社会につなぐ図書館の役割。学文社，2012，168p。引用は p.115-128。
- 20) 陶智子。“「限界図書館」を防ぐ 富山県の図書館を事例に”。高齢社会につなぐ図書館の役割。学文社，2012，168p。引用は p.115-128。
- 21) 中山愛理。“アウトリーチサービスから多様な高齢者サービスへ アメリカの公共図書館”。高齢社会につなぐ図書館の役割。学文社，2012，168p。引用は p.73-74。
- 22) 過去を回想する道具のこと。高齢者が昔使っていた家事の道具や写真などがよく使用される。
- 23) 前掲 21)， p.74-75。
- 24) 高齢者への医療援助制度のこと。
- 25) 前掲 21)， p.75。
- 26) 前掲 21)， p.77-78。
- 27) American Library Association (ALA). Guidelines for Library and Information Services to Older Adults. 2008, 4p. <https://journals.ala.org/rusq/article/viewFile/3692/4026>
- 28) Reference and User Service Association: Guideline for Library Services with 60+ Audience: Best Practice. American Library Association 2017, 4p.
- 29) カナダ図書館協会 . Canadian Guidelines on Library and Information Services for Older Adults. 2002, 7p. <http://cla.ca/wp-content/uploads/Library-and-Information-Services-for-Older-Adults-Nov-2007.pdf>
- 30) Mortensen, Helle A., Nielsen. Gyda S. (財) 日本障害者リハビリテーション協会訳。高島涼子監訳。“認知症の人のための図書館サービスガイドライン”(国際図書館連盟。“Guidelines for Library Services to Persons with Dementia”. IFLA Professional Reports 104). 障害保健福祉研究情報システム (DINF). 2007, 17p. http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/info/dementia_iflaprorep104.html
- 31) 前掲 5)， p8-9。
- 32) 厚生労働省。認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)。2015。 <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html>
- 33) 超高齢社会と図書館研究会。2017。 <http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~donkai.saori.fw/a-lib/>
- 34) Ahlvers, A. Older Adults and Readers' Advisory. Reference & User Service Quarterly. 2006, vol.45, no.4, p.305-312。
- 35) 堀薫夫。高齢者の図書館利用と読書活動をめぐる問題。現代の図書館。2006, vol.44, no.3, p.133-139。引用は p.136。
- 36) 加藤ひろの, 伊藤昭治, 西尾恵一, 村林麻紀, 脇坂さおり。高齢者一人一人の公共図書館へのニーズ。図書館界。2014, vol.65, no.6, p.362-375。引用は p.368-369。
- 37) 同上, p374。
- 38) 木下みゆき。高齢社会と図書館。図書館界, 2017, vol.69, no.1, p.33-43。引用は p.34。
- 39) 最近は「コレクション形成」という用語が一般的であるが、本論文の内容からは「蔵書構成」のほうが理解しやすいと判断した。
- 40) 河井弘志ほか。“1 図書選択・蔵書構成とは何か”。蔵書構成と図書選択。日本図書館協会, 1983, 294p。(図書館員選書 4)。引用は p.13。
- 41) 同上, p.19。
- 42) 三浦逸雄。“1 コレクション形成・管理とは何か”。コレクションの形成と管理。三浦逸雄, 根本彰共著。雄山閣, 1993, 271p。(講座図書館の理論と実際 2)。引用は p.13。
- 43) 前掲 40)， p.21。
- 44) 前掲 40)， p.15。
- 45) 山本昭和。公立図書館図書選択論の理論的發展。図書館界, 2001, vol.53, no.3, p.332-336。
- 46) 山本昭和。図書館資料の収集と選択：公立図書館蔵書構成論の理論的發展。図書館界, 2010, vol.61, no.5, p.512-518。
- 47) ゲーラー (Göhler, Helmut) は1930年生まれで、旧東ドイツズール市立図書館長であった。
- 48) 河井弘志。“第3章 読書興味の理論”。図書選択論の視界。日本図書館協会。2009, 371p。引用は p.35-39。
- 49) 河井弘志ほか。“2 蔵書構成”。蔵書構成と図書選択 新版。日本図書館協会, 1992, 283p。(図書館員選書 -4) 引用は p.14。
- 50) Joyce G. Saricks. Readers' Advisory Service in Public Library. American Library Association, 2005, 211p.
- 51) 長澤雅男。“D 読書相談業務”。参考調査法。理想社, 1969, 262p。引用は p.102-110。
- 52) 小田光宏。“UNIT 10 読書相談サービス”。情報サービス概説。JLA 図書館情報学テキストシリーズ, 日本図書館協会, 1997, 244p。引用は p.54-58。
- 53) 前掲 2)， p.85。

(平成29年9月30日受付)

(平成30年1月5日採録)

付録 選択資料 (抜粋)

A-1	日本書紀暦日原典	日本史
	最新家庭医学大百科	健康
	新版漢字書き順字典	言語
	大相撲力士名鑑	趣味
	プロ野球人名事典	趣味
	禅僧の生活	日本史
	神像～神々の心と影～	日本史
	カイエ シモヌ・ヴェーユ	仕事 (過去)
	玄奘法師西域紀行	日本史
	鉄剣と鏡が語る邪馬台国	日本史
	毛沢東の私生活	世界史
	ルーゲーリック伝	趣味
	クレムリン物語	世界史
A-3	子どもの本の作家たち	趣味
	講座 夏目漱石	話題
	『赤ずきん』の秘密 民俗学的アプローチ	趣味
	学校では教えてくれなかった算数	科学
	日本史の謎は『地形』で解ける	日本史
	昔をたずねて今を知る 読売新聞で読む明治	人物
	季節ノート お天気歳時記	人物
	飛行蜘蛛	科学
	オーストラリア人	世界史
	ヒトラーの遺言	人物
	不思議の国アメリカ 別世界としての50州	国際
	子供の昭和史	経験・記憶
	ニュースが分かる 世界各国ハンドブック	国際
	芸術における数学	科学
A-6	文学作品書き出し事典	文学
	世界の絵本児童文学図鑑	経験・記憶
	作家用語索引 森鷗外	経験・記憶
	作家用語索引 夏目漱石	経験・記憶
	こどもの本の歴史	社会問題
	家なき子の物語	社会問題
	わたしの宮澤賢治論	仕事 (過去)
	1と0との物語	科学 (数学)
	茨城の算数ものがたり	社会問題
	離散数学	社会問題
	密教の可能性	経験・記憶
	祈りは天地を動かす	経験・記憶
	曼荼羅の見方	経験・記憶
	コーランの世界	宗教
	認知心理学	経験・記憶
	スペイン革命	社会問題
	人民戦線	社会問題
	フランス現代史	世界史
	アフリカの現代史	世界史
	中国の現代史	世界史
	太陽と月の神話	日本文化
	日本古代史の謎	日本文化
	日本の侵略	日本史
	黒船とニッポン開国	日本文化
	明治百年	日本文化
	列島に生きる	日本文化
	蛾蝶記	社会問題
	日本沿岸魚類の生態	社会問題
	シルクロードの旅	経験・記憶

	北京の旅	経験・記憶
	ヒロシマ日記	経験・記憶
	正倉院の紙	日本文化
	和紙生活誌	日本文化
	富士ゼロックス20年の歩み	経験・記憶
	太陽エネルギー入門	社会問題
	新電気設備事典	社会問題
	日本航空史	社会問題
	日本の町並み	社会問題
	バロックの真珠	日本文化
	幻視の理想都市	日本文化
	利休の茶	日本文化
	自治体の政策形成能力	日本史
	日本内閣史録	日本史
	ベトナムからみた中国	国際
	北方領土「特命交渉」	経験・記憶
	美術の歴史	日本文化
	英文ビジネスライターがすぐ書ける	経験・記憶
	子どもが描く世界	社会問題
	シャーロックホームズシリーズ	経験・記憶
	ゲーテ全集	経験・記憶
	初級ドイツ語講座	経験・記憶
	日本都市戦災地図	社会問題
	新東京百景	社会問題
	活字を使ったレイアウト	話題
	写植を使ったレイアウト	話題
	名曲解説全集	日本文化
	日本の交響楽団	日本文化
	正倉院の伎楽面	日本文化
	NPO 法人のすべて	話題
	ほめ方・叱り方の心理学	社会問題
	子ども白書	社会問題
	自分を探す	経験・記憶
	近代日本語と漢字	日本文化
	中国語を学ぶ人へ	日本文化
	まんが 漢字でハングル	日本文化
B-4	路上の人々-近代ヨーロッパ民衆生活史-	専攻
	ヴィクトリア朝の下層社会	専攻
	野口英世の母、シカ	経験・記憶
	19世紀の文学・芸術	専攻
	キャラクターメイキングの黄金則	趣味
	ディズニーとライバルたち	趣味
	世界アニメーション歴史事典	趣味
	グリム童話集200歳-日本民話との比較	専攻
	中学生とモモを読む	経験・記憶
	ペロ-童話のヒロインたち	趣味
	天井桟敷の人々	経験・記憶
	アメリカ史のなかの子ども	専攻
	C・S・ルイスとともに	趣味
	1945年のクリスマス-日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝-	興味 (理由はない)
	ロシヤ戦争前夜の秋山真之	経験・記憶
	『クオーレ』の時代	経験・記憶
	ハプスブルク夜話	世界史
	民衆文化とつくられたヒーロー	趣味
	欧米から見た岩倉使節団	日本史